

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13981

研究課題名（和文）近世教育メディア史における「無料」の価値 「施印」に着目して

研究課題名（英文）Priceless Publications: The Role of Free Print in Early Modern Educational Media

研究代表者

ファンステーンパール ニールス (VAN STEENPAAL, Niels)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：50738234

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：近世における「施印」の教育的な意義を解明するため、本研究は、「施印」資料の全国調査と、孝学友山と菱垣元道という人物の「施印」活動の事例研究を行った。前者の結果として、297点の「施印」を仮目録に整理することができた。後者の結果、それぞれの「施印」の作成・流通過程の詳細が浮かび上がったのみならず、彼らが「無料」で配布した理由について、以下のことが明らかになった。すなわち「施印」は、「陰徳」や「妙徳」を積む手段として認識されたと同時に、「揚名」と「売名」にも利用されたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「施印」の作成・流通・意義を解明することを通して、従来、商業出版が提供する「有料」の「知」に依拠してきた教育史研究に、「もう一つ」の「知の伝達」システムの存在を明らかにした。情報が「有料」か「無料」のどちらで伝達されるかによって、その情報の質・量・流通・受容がどう変わるのかについて、今後の研究が無視できない問題となったのである。これはアカデミアに対する問題提起であると同時に、インターネットの普及によって情報の「無料化」が急速に進み、学校や大学の「知」の独占が崩壊しつつある現在社会にも、今後の教育の在り方を考えるための不可避の視座である。

研究成果の概要（英文）：In order to elucidate the pedagogical value of so-called Sein (=freely distributed print) in early modern Japan, this research project consisted of the following tasks: 1. A comprehensive source survey. 2. Case studies of the Sein related activities of Kogaku Yuzan and Higaki Gendo. The first task has resulted in a provisional Sein catalogue of 297 items. The second task has yielded not only insight into the creation and distribution of Sein, but also into the particular significance of this medium to their producers. It appears that Sein were valued not only for their power to collect virtue and merit, but also as tools to gain recognition and fame.

研究分野：教育史学

キーワード：施印 出版文化 無料 メディア 教化 陰徳 妙徳

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 先行研究

日本における教育史学の誕生当初から、「施印」は着目されてきたメディアである。というのも、乙竹岩造は石門心学におけるその使用をとりあげ、「施印」の一枚刷りという形態と、その分かり易い内容が、「教化の光をば檜籬茅屋の間にもさし込」む工夫であると評価している(『施印とポスター』1931)。石川謙も、子供が「施印」を収集して製本したがる点に着目して、その配布が講釈への「出席を奨励」するとともに、モノを「丁寧に取扱」う慣習を学ばせるという、教育的な工夫を見出している(『石門心学の研究』1938)。

三十年代という早い時期の着眼にもかかわらず、後年の研究は「施印」を課題として追及せず、もっぱら乙竹・石川に依拠するのみである。しかし、この乙竹・石川の「施印」理解は、大変限定的かつ推測的なものであったといわざるをえない。限定的というのは、その指摘が当てはまるのは石門心学の文脈に限られている点を、推測的とは、それが精密な分析結果ではなく、断片的かつ簡略的な資料紹介に基づいている点をさす。

### (2) 申請者の研究

申請者はすでに、体系的かつ実証的な「施印」の事例研究を通して、乙竹・石川の理解を大幅に修正・補足する、以下のことを明らかにした(“Taming the Fire Horse: The Free Distribution of Anti-Superstition Pamphlets in Early Modern Japan” *East Asian Publishing and Society*, 5:2)。第一に、石門心学のネットワークを經由して流通した「施印」は、必ずしも石門心学者が作成したものに限らないこと。第二に、「施印」作成者の念頭にあった読者層は、石門心学のコミュニティーに限定されず、全国規模のものであったこと。第三に、「施印」を効率よく読者に届けるため、「施主」による改版という工夫が頻繁に行われたこと。第四に、「施印」は単独のメディアとしてではなく、それは講釈をはじめ、絵馬や出版物を伴う、総合的メディア戦略の一環として行われたものであったこと。第五に、「施印」が無料で配布されたことは、単に広範な読者層に届けるための手段としてだけでなく、「無料」であること自体に積極的な意味が見出されたためでもあったこと。

## 2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ、「施印」は、もはや石門心学における「脇役」の枠をはるかに超え、壮大な発信力と動員力を発揮した、近世の教育メディア空間の「主役」であったことが明らかである。そしてその役割の解明が、本研究の目的である。その究明のため、以下二つの作業が必要となる。

### (1) 「施印」の現存状況の解明

「施印」が従来の研究で軽視されてきた背景には、商業出版への執着のほかに、「施印」の資料的特質がある。第一に、「施印」は、多くの場合は破損しやすい一枚刷であり、そもそもモノとして残りにくい。第二に、仮に残ったとしても、「施印」の内容は、多くの場合は歴史的状況に応じて作られたため、永久保存に値するほどの普遍性を有しておらず、そもそも保管の対象になりにくいものであった。第三に、仮に保管されたとしても、「施印」はその形態において、「施印」(もしくは施主や印施、施版)という文字以外、ほかの一枚刷や和本と区別がないため、書

誌情報として無視されがちである。よって、文書館や資料館の目録やデータベースに、「施印」であるという書誌情報が漏れたり、「かわら版」などと誤って登録されたりするが多い。「施印」という課題を本格的に追及するには、まず「施印」の現存状況を解明し、以上のような資料的難関を超える必要がある。

## (2) 「施印」の教育的意義の解明

「施印」には、教育的な意義があったと先行研究は断言したが、その結論は二つの問題を孕んでいる。第一に、資料的な裏付けが乏しいことである。「施印」に認められた教育的な意義は、近世当時の人々の叙述や、書誌学的な分析を踏まえて抽出されたものではなく、あくまでも憶測の域を出ない決めつけであった。第二に、この場合、教育的な意義とされたのは、あくまでも教育者側の意図としての意義であったことである。しかし、教育という営みにおいて肝心なのは、教える側の意図よりも、学ぶ側の心境のはずである。両側の気持ち、モノや人を媒介して結ばれてはじめて「教育」が成立する。よって、「施印」を教育的に位置づけるのは、その作成をめぐる事情に加えて、その流通と受容も検討する必要がある。具体的には、誰が、どの予算で、何を意図に、どれほどの部数で、どのような工夫を施しながら、いかなる内容の書物を、なぜ無料で、誰を対象に、どの手段で配布し、それが結局誰によって、どのように理解され、どのような「学び」につながったのか、この一連のプロセスを解明する必要がある。

## 3. 研究の方法

### (1) 「施印」の現存状況の解明：資料調査

「施印」研究は乏しいため、「施印」資料のコレクションや文庫も存在していない。もしくは、そういった文庫が未だ存在しないため、「施印」も研究の視野に入っていない。いずれにせよ、「施印」の現存状況を把握するため、ゼロ状態から着手する以外の方法はない。上述のように、「施印」はその形態上、「施印」マーク以外に何の特徴もないため、「施印」と勘違いされやすい資料（瓦版や引き札など）や、「施印」によくみられる特徴を示す資料（著者不明やコヨリ綴じ本など）が多く所蔵されている資料館を歩きまわり、一点一点現物を確認するしかない。本研究の資料調査では、近世資料を豊富に所蔵する資料館・図書館を訪問し、「施印」として判明できるものを仮目録に整理する。

### (2) 「施印」の教育的意義の解明：事例研究

「施印」を本格的に検討した研究が皆無であり、その全体像についてはまだ見当がつかない中、当分は事例研究を重ねる必要がある。上述の「施印」ならでは資料的困難があるため、取り上げる事例の選択において好みや利便性を余り余りない。必然的に、「施印」がもっとも豊富に現存している事例から着手することとする。そこで、本研究では、以下の二つの人物の施印活動を検討する。第一に、孝学友山である。孝学友山とは近世後期京都の水火天満宮境内において「孝学所」という、孝道を広めるための組織を設置したものである。孝学所は天保十二年開所から、少なくとも十六年間は活動を続けていた。その間、数多くの私家版と「施印」を世に出した。第二に、菱垣元道である。菱垣元道とは、近世後期大坂にて易医師として活躍した人物である。その腕前が評価され、医者として「法眼」という僧位、陰陽師として「西三十三ヶ国吟味取締土御門殿家司出役」という役職まで出世したという。易医師として得た「壹ヶ年に千両」にも及ぶ膨大な収入をもって、施印をはじめ、多種多様な施行を展開していた。以上の人物の施印活動を多面的かつ実証的に検討することを通して、その「施印」の教育的な意義を解明する。

## 4. 研究成果

### (1) 「施印」の現存状況を解明する：史料調査

研究助成期間を通して、継続的に「施印」の資料調査を行ってきた。その結果は、「瓦版」コレクションとして有名である、大阪府立中之島図書館（枚記号）と刈谷市中央図書館（佐藤コレクション、村上文庫）の中に合計3点の「施印」もあったことが判明した。同じく、山名新聞歴史資料館の瓦版目録にも、「施印」が3点掲載されていた。また、全国の摺物を網羅的な整理した『摺物総合編年目録（第二稿）』6184枚のデータの再調査によって、「施印」であることが目録に明記された54点に加え、明記されていなかったもの9点を新たに発見できた。総じていえば、杏雨書屋、大阪歴史博物館、玉川大学、筑波大学、東洋大学、早稲田大学、国学院大学、成田山仏教図書館、大阪天満宮、堺市立中央図書館、慶應義塾大学、都立中央図書館、鶴見大学、玉川大学、九州大学、岩瀬文庫での調査を踏まえ、現時点で297点の「施印」を仮目録に整理することができた（膨大な石門心学系の「施印」を除く）。

### (2) 「施印」の教育的意義の解明：事例研究

#### 「施印」の作成・流通

「施印」の作成・流通・受容の過程に関する具体例がいまだに皆無であった。本研究では、孝学友山（【孝】）と、菱垣元道（【菱】）という人物のそれぞれの施印活動の事例研究を通して、これに光を当てることができた。各事例研究の結果を一般化することはできないが、ここでは便宜上、交えて記すこととする。第一に、幕藩権力は「施印」活動を必ずしも歓迎したわけではないこと（【菱】）。第二に、幕藩権力とのもめごとを防ぐために施主が工夫をこらしたこと（【孝】）。第三に、伝播方法として、町中に張り出すこと、出張講釈の際に配布すること、自宅に常備して提供すること、版木を貸し出すことや（【孝】）、自分が主催する祭でのくじ引きの景品として、四国遍路を終えた人への褒美として、易医者としての客への接待品として与えることもあった（【菱】）。第四に、その配布部数は、膨大の数にも及んだこと（【菱】）。第五に、配布活動が長年に続けられたこと（【孝】【菱】）。第六に、おそらく膨大な「施印」部数を区別するための目印として、「施印マーク」のデザインや、押印場所が変更されたこと（【孝】）。

以上、「施印」の作成と流通について解明はできたが、残念ながら受容の側面を明らかにできる資料は今回の事例研究では見当たらなかった。ぜひとも今後の課題にしたい。

#### 「施印」の意義

第一に、「施印」が基本的に「匿名」で配布するものであり、そのことによって「陰徳」を積もうとする意識があったことがうかがえた。近世の商業出版制度において、版元の姓名を刊記にあらわすことが求められたが、「無料」の「施印」にはそういった決まりはなかった。要するに、「施印」が「無料」で配布されたが故に付随的に生じた「匿名」性は、有意義な特徴とみなされたのである（【孝】）。第二に、「匿名」で配布することに意味があるという認識とは真逆に、施主の名前をあえて附記し、「後世に名を揚げる」役割も十分意識されており、実際に利用もされていた（【孝】）。第三に、施主の名前を附記する場合は、「施印」一部につき一つの姓名しか記さない慣習があったようである。同土企画されたと思われる「施印」も、各施主が「施印」を個別に配布したものである。個人名義で出された「施印」に伴う「陰徳」や「揚名」効果は、人と共有すべきものではない、強い個人意識があったと考える（【孝】）。第四に、「施印」は易医者に不可欠な道具として認識された。易医者が専門とする易道や医道には、「妙徳」という、主に「陰徳・

辛抱・智利」からなる不思議な力が必要であり、「施印」とは、それを積むための修行と世に顯すための「売名」手段であった。言い換えれば、「施印」は商売道具であったのである。

以上、本研究から「施印」の教育的な意義について、「徳」と「名」という二つの要素があったことが明らかとなった。要するに、「施印」は、「陰徳」や「妙徳」を積む手段として認識されたと同時に、「揚名」と「売名」にも利用されていたものであったのである。しかし、この結果は、我々に以下のような違和感を覚えさせるであろう。第一に、これらの要素は、お互いに矛盾していること。第二に、これらの要素は、「教育」と無縁に見えること。この違和感を、近代「教育」を相対化できる、近世感覚にそった「教育」観念の再構築にむけた、今後の研究の切っ掛けにしたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 26
2. 論文標題 商売道具としての施印 近世易医師菱垣元道の「妙徳」修行と宣伝	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 23-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 15
2. 論文標題 「廿万人え施す」 菱垣元道『宝抓取』の執筆意図と出版状況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育史フォーラム	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 3
2. 論文標題 『孝学社中 実明記』 近世後期京都における「孝学所」の社中記	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世京都	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 38
2. 論文標題 近世「教化」史の再考 鈴木氏書評への応答として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育史研究	6. 最初と最後の頁 149-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 22
2. 論文標題 施印というメディア 近世後期京都「孝学所」施印の流通と意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 31 63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 13
2. 論文標題 『孝連人物考 和合編』 美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育史フォーラム	6. 最初と最後の頁 53 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ファンステーンパール、ニールス	4. 巻 12
2. 論文標題 『三野人物考 和合編』 順序なき人名録の「謎」と「真相」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『教育史フォーラム』	6. 最初と最後の頁 89-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 VAN STEENPAAL, Niels
2. 発表標題 What's in a Name: Fame and Anonymity in Early Modern Free Print
3. 学会等名 The 23rd Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------